

ISSN 2187-0691

Japanese Journal of Maritime Activity

Vol.9 No.2

第9巻 第2号

# 海洋人間学雑誌

November 2020

令和2年11月

第9回日本海洋人間学会大会  
大会号

日本海洋人間学会

Japan Society for Maritime Activity

# 目 次

第9回日本海洋人間学会大会 大会次第	41
学会役員・大会実行委員会	42
プログラム	43
学会大会参加者へ	44
遠隔会議システム（Zoom）による開催について	44
一般発表者へ	45
海洋人間学雑誌 投稿料無料のご案内	45
一般発表抄録	46

編集後記/52

# 第9回日本海洋人間学会大会

## 大会次第

主催：日本海洋人間学会

会期：2020年12月5日（土）  
遠隔会議システムによるオンライン開催

### 【大会本部】

〒108-8477 東京都港区港南4-5-7  
東京海洋大学内 日本海洋人間学会事務局  
TEL/FAX：03-5463-0638（藤本研）  
E-mail：jsmta@jsmta.jp

## 第9回日本海洋人間学会大会

### 学会役員

会長 : 久門明人

副会長 : 海野義明 矢野吉治

常務理事 : 千足耕一

理事 : 飯島伸雄 神田一郎 國枝佳明 佐々木剛 佐野裕司 武田誠一  
蓬郷尚代 坂利明 藤本浩一 淵真輝 松本秀夫

監事 : 菊地俊紀 寺澤寿一

事務局長 : 蓬郷尚代 (兼任)

### 大会実行委員会

実行委員長 : 藤本浩一

委員 : 金田晃一 千足耕一 蓬郷尚代 松本秀夫

## プログラム

12月5日(土)

※13時を目途として、学会大会 ZoomURL にアクセス願います。

13:05 学会開会の辞

13:10～13:55 口頭発表 セッション1

- 座長：飯島 伸雄（独立行政法人 海技教育機構）
- Oa01. クロスベアリングの基礎的指導に関する検討  
齊藤 瑞己（神戸大学）
- Oa02. 長期セーリングにおけるリスクの捉え方の変化について  
吉富 愛（神戸大学）
- Oa03. 糸満市における船大工を対象とした聞き取り調査  
千足 耕一（東京海洋大学）

14:00～14:45 口頭発表 セッション2

- 座長：藤本 浩一（東京海洋大学）
- Ob01. 三宅島海水浴場監視活動における新型コロナウイルス感染防止対策について（実践報告）  
高野 修（東京海洋大学大学院）
- Oa04. 成人男性を対象とした息こらえ潜水の生理学的な影響  
永島 昇太郎（帝京大学）
- Oa05. 海洋スポーツ愛好者のワークライフインテグレーションに関する検討  
松本 秀夫（東海大学）

14:50～15:35 口頭発表 セッション3

- 座長：松本 秀夫（東海大学）
- Oa06. スクーバダイビングが気分変容に及ぼす影響について  
加藤 淳一（東京海洋大学大学院）
- Oa07. サバニ帆漕レース参加者を対象としたイベントの満足度に関する研究  
蓬郷 尚代（東京海洋大学博士研究員）
- Oa08. ウインドサーフィン・ワールドカップにおける観戦者のスポンサーフィットが観戦者の行動意図に及ぼす影響  
平野 貴也（名桜大学・順天堂大学協力研究員）

タイトルの記号は以下の通りです

Oa：口頭による研究発表

Ob：口頭による実践報告

15:35～ 学会閉会の辞

## 学会大会参加者へ

### 1. 筆頭発表者の方へ

筆頭発表者は、2020年度（2020年8月1日～2021年7月31日）分の年会費（正会員 6,000円、学生会員 3,000円、賛助会員 一口 20,000円）を 2020年11月20日金曜日までに納めた本学会会員に限ります。なお、発表筆頭者である正会員のみ、発表料として 1,000円を2020年11月20日金曜日までに納入してください。なお、発表筆頭者である学生会員の発表料は無料です。

### 2. 参加者の方へ

参加者は、2020年度（2020年8月1日～2021年7月31日）分の年会費（正会員 6,000円、学生会員 3,000円、賛助会員 一口 20,000円）を 2020年11月20日金曜日までに納めた本学会会員に限ります。

### 3. 本学会会員以外の参加希望の方へ

正会員からの紹介を経ること、ならびに参加費 2,000円を 2020年11月20日金曜日までに納入頂くことを条件に臨時会員として参加可能です。正会員からの紹介に関しては、必ず紹介者である正会員が学会メールアドレス（[jsmta@jsmta.jp](mailto:jsmta@jsmta.jp)）へ 2020年11月13日金曜日までに、臨時会員希望者の氏名およびメールアドレスを連絡して下さい。

## 遠隔会議システム（Zoom）による開催について

### 1. ZoomURL およびパスコードの送付

2020年度（2020年8月1日～2021年7月31日）分の年会費（正会員 6,000円、学生会員 3,000円、賛助会員 一口 20,000円）を納めた本学会会員、ならびに正会員の紹介を受け、参加費 2,000円を納めた臨時会員へ、メールにて学会大会の ZoomURL およびパスコードを送付します。なお、筆頭発表者の発表料、参加を希望する会員の年会費、ならびに臨時会員の参加費の納入期限は、いずれも 2020年11月20日金曜日までとなっております。期限を過ぎての納入（振込）に関しては、ZoomURL およびパスコードを送付できない場合もありますので、ご注意願います。

### 2. 参加時の注意点

ZoomURL およびパスコードは漏洩しないよう徹底した管理をお願いします。学会中の Zoom 画面のスクリーンショット撮影ならびに動画撮影、音声録音は不可とします。また、Zoom 画面の画像や音声については、ZoomURL およびパスコードが付与された方以外は、視聴できないような環境の確保にご協力下さい。

発表料、年会費、および参加費（臨時会員）の納入は、以下の学会口座への振込にてお願い致します。

ゆうちょ銀行  
口座名義：日本海洋人間学会  
口座番号：00150-6-429943

インターネットバンキング  
銀行名：ゆうちょ銀行  
・金融機関コード:9900  
・店番:019  
・預金種目:当座  
・店名:〇一九 店（ゼロイチキユウ店）  
・口座番号:0429943

#### 各種振込時のお願い

- ・郵便局の振込用紙をご利用の場合は、振込金額の種別を通信欄にご記入ください。  
(記入例：2020 年会費として)
- ・インターネットバンキングをご利用の場合は、振込人氏名の前に振込金額の種別をご入力ください。  
(記入例：2020 ネンカイヒカイヨウタロウ)。

## 一般発表者へ

第9回学会大会では、一般発表は口頭発表のみにて実施します。

1. 発表者は、ご自身の発表の前までに必ず学会大会 ZoomURL にアクセスしてください。
2. 発表は、ご自身のパソコン上で操作する PowerPoint 等のプレゼンテーションソフトウェアで作成したファイルを、Zoom の画面共有機能を用いて共有しながら実施してください。
3. 発表の持ち時間は、**13分（発表10分、質問3分）**です。呼び鈴は8分に1回、10分に2回、13分に3回鳴ります。

**発表時間を厳守して下さい**。持ち時間の13分を経過した場合は、その場で発表を打ち切って頂くこともあります。

4. PowerPoint 等で作成したファイルへの動画の埋め込みは、Zoom 画面共有上では、視聴する側の動画の再生コマ数が格段に低下するため推奨しません。
5. プレゼンテーション用のファイルに関しては、インターネットを介して提示されることから、著作権や肖像権を遵守して作成してください。なお、本件に関しては別途、筆頭発表者へ注意事項等についてご連絡します。

## 海洋人間学雑誌 投稿料無料のご案内

第9回学会大会にて口頭発表が行われた演題につきましては、2021年1月31日までに海洋人間学雑誌（ISSN:2187-0691）にご投稿頂きますと、通常投稿料が原著、研究資料、報告書は1編あたり10,000円、短報は1編あたり5,000円となっておりますところ、全て無料と致します。投稿規定につきましては学会HP（<https://www.jsmta.jp>）をご参照下さい。

## 一般発表抄録

タイトルの記号は以下の通りです

Oa : 口頭による研究発表

Ob : 口頭による実践報告



セッション1

発表時間 13:10~13:25

Oa01. クロスベアリングの基礎的指導に関する検討  
齊藤瑞己・瀧 真輝 (神戸大学)

キーワード: クロスベアリング、方向感覚、指導法  
【目的】

船舶の位置(船位)を知ることは、船舶を安全に運航させるために操船者に必要不可欠な専門技術の1つである。沿岸航海において基礎となる船位決定法は、周囲の灯台や山頂などの物標と自船との方位や距離を測定し、それらの情報を海図上で照らし合わせて船位を割り出すクロスベアリング(交差方位法)である。山本(2015)と赤坂(2017)はクロスベアリングの得手不得手に方向感覚の個人差が関係しており、成長段階で変化する空間認知の参照系の発達に依存する傾向があると示唆している。さらに五反田(2019)は個人の成長段階とは別に、クロスベアリングの得手不得手に関係する特別な考え方や手法が存在する可能性があることを示唆した。これらを明らかにすることでクロスベアリングを不得意とする学生にとっての理解を促す新たな指導法の提案が可能になると考える。そこで本研究はクロスベアリングを得意とする学生と不得意とする学生の具体的な考え方や手法を比較し、学生の特徴を探索的に検討することを目的とする。

【方法】

神戸大学海事科学部の船員養成課程(航海)に所属する学生(3回生16人、4回生31人)の協力を得た。3回生は1カ月の乗船訓練を、4回生は3カ月の乗船訓練を修了していた。方向感覚質問紙(SDQ-S)、チャートワーク質問紙(五反田, 2019)に回答を求め、その直後にクロスベアリングにおける個々の具体的な考え方や手法について、個別にヒアリング調査を実施した。

【結果と考察】

方向感覚質問紙(SDQ-S)の結果は、最高得点85点、最低得点25点、平均得点49.8点(SD=12.6)であった。この得点を基に上位16人(同順位)(33.3%)、下位15人(33.3%)をそれぞれ方向感覚の良群と悪群とした。ヒアリング調査の結果、良群には自身の思考過程や意図について具体的に解答する傾向が見られた。良群と悪群の比較の結果、現在の指導法は主に練習回数により船位決定技術を向上させる指導法だと考えられ、学生の苦慮する部分の理解を手助けする指導法が必要だと考えられる。詳細については発表時に報告する。

セッション1

発表時間 13:25~13:40

Oa02. 長期セーリングにおけるリスクの捉え方の変化について

吉富 愛・瀧 真輝 (神戸大学)

キーワード: 長期セーリング、成長、リスクの捉え方  
【目的】

程度の差はあるものの自然体験活動にリスクはつきものである。高所登山に関する研究(村越, 2014)は、経験をもとに超えてはならないレベルを維持してリスク対処をしていると指摘している。ルー・デルピージュ(1973)は、セーリングは学習者の創意工夫の余地が大きく、学習の積み重ねが成果に反映されやすい特性を持った教材であると述べている。自然体験活動の経験を通じて当然リスクの捉え方は変化すると考えられるが、長期の単独セーリング活動においては、困難な事象を直接的に経験することが考えられ、どのようにリスクの捉え方が変化するか興味深い。そこで本研究では著者が取り組んだ長期セーリングを対象として、経験を通じて著者のリスクの捉え方がどのように変化したのか検討する。

【方法】

著者自身が2019年7月21日~10月8日に実施した長期セーリングを対象とした。26フィートのクルーザーヨットを用い、単独で時計回りに本州一周を達成した。航海は基本的に朝から夕刻までであり、毎日出港前と入港後に毎日の航海記録をつけ、また併せてボイスレコーダーによる音声を録音した。航海記録は出航前に気象海象、航海行程、危険箇所、入港後実際との差、危険への対処、感想を記入した。ボイスレコーダーは出航前に航海行程、危険箇所、自分の気持ちを録音したものであった。長期セーリングは兵庫県の西宮市を起点終点として行っており、瀬戸内海、日本海、太平洋という海域に分け、航海記録等をKJ法(川喜田, 1997)により分析した。

【結果と考察】

瀬戸内海ではリスクを捉えられず精神的にも正常ではなかったという結果が示された。日本海側では精神的に疲れ、焦りからの冷静な判断ができないという結果が示された。後半の太平洋側ではリスクを捉える正確な判断と新しい知識を学ぶ意欲を持つという結果が示された。これらの結果からリスクの捉え方は気持ちの余裕や経験によって変動すると考えられた。詳細は発表時に報告する。

セッション1

発表時間 13:40~13:55

Oa03. 糸満市における船大工を対象とした聞き取り調査

千足耕一・蓬郷尚代・中原尚知（東京海洋大学）

キーワード：木造サバニ、船大工、伝承

【目的と方法】

沖縄地方で使用されてきた民族的な小舟であるサバニについては、その伝統的な技術や信仰について調査記録すべきであるとの指摘がある。本研究では、沖縄県における帆かけサバニの復興運動の背景およびサバニの造船技術が伝承される過程を明らかにすることを目的として、糸満市において現役でサバニを作成している船大工2名を対象として聞き取り調査を実施した。

【結果と考察】

サバニは、時代の変化に伴い、複材化、大型化し、動力化してFRP化され、木造船を作るのできる船大工が減少の一途を辿り、帆をあげて海の上を走る姿がほとんど見られなくなった状況にあった。織本憲資氏が1983年に著した『日本土人南島探訪記』に幻の古式サバニ「おもしろ」として記録が残るサバニの大工である大城清氏は、僅かに残っていた帆走技術を持つ名城在住の80代男性とともに馬天港で1990年代後半（25年ほど前）に帆走したことが注目され、帆掛けサバニの伝統が僅かに引き継がれた。このような事実が、雑誌KAZIに掲載され、ヨットマンたちにサバニが知れ渡ることとなった。その後、2000年からサバニ帆漕レースが始まり、20回目継続されている。この間、大城清氏は弟子の高良和昭氏とともにサバニを造り続けている。

高良氏は、30歳まで実業団に所属するレーシングカヌー選手であり、2001年の第2回目大会からサバニ帆漕レースへの参加を始めた。当時、ハワイのアウトリガーカヌー工場で修行を行い、糸満でもカヌーを作ったことが師弟で一緒にサバニを作るきっかけとなっていた。サバニ職人（船大工）といえども、サバニの制作だけではなく、ファイバーでの修理等の作業を行いながら、サバニやウエークづくりの伝統を引き継いでいる。凡そ10年が経過するなか、刃物を研いだり、フンドウ（板を継ぎ合わせる楔）を作ったりすることから始めて、自分なりにサバニを作成することが出来るようになってきたと語った。

謝辞 本研究はJSPS 科研費（課題番号18K10922）の助成を受けたものです。

セッション2

発表時間 14:00~14:15

Ob01. 三宅島海水浴場監視活動における新型コロナウイルス感染防止対策について（実践報告）

高野 修（東京海洋大学大学院）、千足耕一（東京海洋大学学術研究院）、永島昇太郎（帝京大学）、松本秀夫（東海大学）、小泉和史（日本体育大学）、蓬郷尚代（東京海洋大学博士研究員）、瀬田芳博（（一財）社会スポーツセンター）

キーワード：新型コロナウイルス感染防止対策、リスクマネジメント、水辺活動

【はじめに】

2020年の夏季は、新型コロナウイルス感染拡大により、多くの人が集まる海水浴場は感染のリスクが考えられ、また、監視員の中心となる大学生が、課外活動自粛指示を受けたことにより活動が出来ず、監視員の確保が難しくなったことから、全国的に海水浴場を開設しない地域が多くみられた。しかし、開設しなくても遊泳者が訪れることが考えられ、監視員がいない状況での事故が懸念された。島内外から多くの海水浴客が訪れる三宅島では、水難事故のリスクを考え海水浴場を開設し、監視員を配置することとした。

【実践の概要】

監視活動の実施にあたり、社会スポーツセンターが作成した“三宅島海水浴場監視活動における新型コロナウイルス感染防止に関するガイドライン”を基に、監視員は「活動前（2週間前から）」、「三宅島への移動時」、「宿舎での対応」、「監視活動中の対応」、「救助活動に対する行動要領」、「帰宅時」、「帰宅後」に分けて防止対策を実施した。また、“健康チェックシート”を作成し、活動の2週間前から体調を確認し、活動中は一日3回の健康チェックを行った。

海水浴場には、「ソーシャルディスタンスを確保して下さい」、「来場者には体温計測をさせていただきます。37.5℃以上の熱がある場合は、入場をご遠慮下さい」、「海水浴場内が混雑した場合は、入場を制限させていただくことがあります」、「飛沫感染防止のため、大声で話すことはお控え下さい」、「長時間の滞在はお控え下さい」、「熱中症に気をつけて、水分補給と休憩を取りましょう」という6項目を記載した看板を設置し、来場者に協力をお願いした。

宿舎については、マスク着用やこまめな手指消毒の他、集合しての食事をしないなどの対策を行った。

全ての監視活動終了後、2週間経過した時点で監視員及び島民からの感染者はなく、水難事故を含め無事故で終了した。具体例等を総合的に検討した内容を報告する。

セッション2

発表時間 14:15~14:30

Oa04. 成人男性を対象とした息こらえ潜水の生理学的な影響

永島昇太郎(帝京大学)、千足耕一(東京海洋大学)  
キーワード: 成人男性、断続的な息こらえ潜水、血中乳酸値、心拍数、運動強度

【目的】

水面下での息こらえ潜水と乳酸の関係については、フリーダイビング競技を対象とした研究がみられるものの、海洋レクリエーションとして楽しめるスキンドIVINGの形態である断続的な息こらえを対象とした研究は少ない。本研究では成人男性を対象とし断続的な息こらえ潜水の生理学的な影響について探索的に明らかにする。

【方法】

成人男性のスキューバダイビングの経験者である6名(平均年齢 50.17±6.82歳)を対象として、マスク、スキューバ、フィンを装着して25m屋内プールでの断続的な閉息潜水を含むプロトコル(25mの遊泳を30秒→浮き姿勢を30秒→25mの潜水を30秒→立位姿勢を1分30秒)について10セットを行い、セットごとの立位姿勢時に指尖部にて血中乳酸値と心拍数の測定を行った。また、10セットが終了した後の退水2分後及び5分後にも血中乳酸値測定と心拍数の測定を行った。これらの実験前の安静時、各セットの閉息潜水後10回、退水2分後、退水5分後の血中乳酸値及び、心拍数から算出した運動強度について一要因分散分析を行った。

【結果と考察】

本測定での乳酸値は安静時平均値約1.5mmol/lで、1セット目の約2.5mmol/lから7セット目の約3.9mmol/lまで徐々に上昇が見られたものの、それ以降は下降傾向となり、10セット目には約3.4mmol/lまで低下した。

また、運動強度については1セット目で約23.4%HRmaxで、2セット目に約22.5%HRmaxに下降し、5セット目までに約28.7%HRmaxと徐々に上昇が見られ、それ以降は9セット目の約27.5%HRmaxまでに緩やかな下降傾向がみられ、10セット目には約27.7%HRmaxまで低下した。

フリーダイビングスタティックにおける潜水後の血中乳酸値の先行研究では、安静時平均乳酸値が約1.7mmol/l、運動後平均乳酸値が約2.7mmol/lという報告があり、本測定の対象者は、反復回数が進むにつれて負担が低減し、結果的には断続的な閉息潜水の運動強度は低いものであったことが考えられる。

セッション2

発表時間 14:30~14:45

Oa05. 海洋スポーツ愛好者のワークライフインテグレーションに関する検討

松本秀夫・小林俊(東海大学)、蓬郷尚代・千足耕一(東京海洋大学)

キーワード: ワークライフインテグレーション、海洋スポーツ・新しい生活様式

【目的】

発表者らは、これまで海洋スポーツ愛好者のレジャー関与がライフスタイルや幸福感・満足感に与える影響について検討し、関与が高いほど、ライフスタイルの変容や、幸福感・満足感が高いことを明らかにしてきた。ライフスタイルの変容では、関与の高まりから仕事を変える、居住地を変えるなどの行動を行っている。

現在、世界的に流行している新型コロナウイルスの影響もあり、テレワークが促進され、仕事・生活に大きな変化をもたらしている。このような働き方については、これまでも、内閣府が、仕事と生活の調和(ワークライフバランス:WLB)を提唱してきた。しかし、経済同友会(2008)は、WLB(調和)は発展させた、ワークライフインテグレーション(融合・統合:WLI)を提唱し新たな働き方として注目されている。本研究は、海洋スポーツ愛好者のWLIについて検討することを目的とした。

【方法】

これまで公表されてきた文献、企業での導入事例等と、筆者らが実施してきた海洋スポーツ愛好者のインタビュー調査からWLIについて考察を行った。

【結果及び考察】

例えば、アディダスは、2010年WLBでは対応ができない実態からWLIに変更し、いつ働くかいつ休むかやスポーツの時間にあてるかを自分で決めることにしている(Globe+,2018)。また、パタゴニア本社では、良い波が来たら、いつでもサーフィンに行くことが可能で、その効果として、責任感、効率性、柔軟性、協調性、人材確保があげられている(高橋,2016)。過去に行ったインタビュー調査の結果では、カヌーのために仕事の時間を変える、居住地を変える行動や、その希望を持つ愛好者は多い。また、居住地や仕事の時間を変え、家族との充実した生活や、そのコミュニティでの充実感、幸福感を得ている。

【まとめ】

新型コロナウイルスによる新しい生活様式が叫ばれる中、海洋スポーツ愛好者は、海というフィールドにおいてWLIによる豊かな生活を送っていることが示唆された。今後は、海洋スポーツ愛好者のWLIに関して詳細な検討を行う。

セッション3

発表時間 14:50~15:05

Oa06. スクーバダイビングが気分変容に及ぼす影響について

加藤淳一・千足耕一（東京海洋大学大学院）

キーワード：スクーバダイビング、POMS、レクリエーション効果チェックリスト

【目的】

スクーバダイビング（レジャー・スクーバダイビングまたは、ファンダイビング）は、最も人気のある海洋スポーツの一つであるが、スクーバダイビングが心身や気分変容に及ぼす影響を検証した研究は少ないことから、スクーバダイビングを実施することによるダイバーの気分変容について調査することを目的とした。

【方法】

那覇近郊のダイビングエリアでスクーバダイビングを実施したダイバーを対象とし、調査対象者に対して質問紙を配布しながら、本調査の目的等を伝えて調査協力を仰ぎ、調査対象者1名につき2回（スクーバダイビング実施前・実施後）無記名自記式質問紙に回答を求めた（2014年9月~12月に調査実施）。得られた回答について、単純集計、スクーバダイビング実施前・実施後のPOMS得点およびTMD得点においてはPaired t-test、スクーバダイビング実施後のPOMSの6尺度とレクリエーション効果チェックリスト10項目においては相関関係分析を行なった。

【結果と考察】

287名から回答が得られ、「性別」では男性が女性より若干多く、「年代別」では40代が最も多い構成であった。スクーバダイビング実施前・後の比較において、「活気」を除く5つの陰性尺度のPOMS得点およびTMD得点について有意差が認められたことは、スクーバダイビングを実施することにより調査対象者の陰性感情が低下し、気分・感情を陽性方向へ導く効果が示されたと考えられる。また、スクーバダイビング実施後のPOMSの6尺度とレクリエーション効果チェックリスト10項目においては、有意な相関関係が多数確認された。

【結論】

本調査結果より、スクーバダイビングが気分変容にある一定の効果を与える側面があることが示唆された。しかし、本調査研究で得られた結果をより確かなものにするため、海況や潜水条件等を考慮した追加調査が必要であると考えられた。

セッション3

発表時間 15:05~15:20

Oa07. サバニ帆漕レース参加者を対象としたイベントの満足度に関する研究

蓬郷尚代（東京海洋大学博士研究員）、中原尚知・

千足耕一（東京海洋大学学術研究院）

キーワード：伝統的的海洋文化財、サバニ、スポーツイベント

【目的】

沖縄地方には、漁撈活動や海の民の生活の足として使われていた木造船のフーカキサバニ（帆掛サバニ）がある。フーカキサバニの伝統を復興させる運動の一つとして、沖縄県座間味島から那覇港までの約36kmをサバニによって渡る「サバニ帆漕レース」が2000年にはじまり、2019年で第20回を迎えた。大会への参加チーム数は平均34.6艇であり、レース開催に合わせて沖縄県内外から多くのチーム関係者が座間味島に来島している。サバニ帆漕レースは沖縄県において、長期継続開催されている数少ない海洋スポーツイベントの一つと言える。本研究では、サバニ帆漕レース参加者に対してレース満足度等を調査し、参加者の立場からレース運営を評価するとともに、参加者のレースへの取り組み方を明らかにすることを目的とする。

【方法】

沖縄県にて開催されるサバニ帆漕レースに参加経験のあるサバニ愛好者を対象に、web調査票を設置する形でアンケート調査を行った。回答の依頼は機縁法を用い、SNSでの情報公開やメール等においてURLを周知した。

【結果と考察】

Web調査により、19チーム64名からの回答が得られた。回答者は50歳代が20名と最も多く、次いで40歳代が18名であった。沖縄県居住者は41名・64.1%（座間味村21名・32.8%、本島16名・25.0%、座間味村以外の島部4名・6.3%）、沖縄県外居住者は23名・35.9%であった。レース初参加は6名・9.4%であり、参加者の90%以上はリピーターであることが示された。満足度については、「非常に満足」「やや満足」と回答された項目が多いなか、「申込み方法」や「レースに関する情報発信」については検討の余地があることが示された。「20回大会全体」「本レース（古座間味~那覇）のコース設定」「レース開催時期」「表彰式（那覇）」については特に満足度が高い（70%以上）結果であった。

謝辞 本研究はJSPS科研費（課題番号18K10922）の助成を受けたものです。

セッション3

発表時間 15:20～15:35

Oa08. ウインドサーフィン・ワールドカップにおける観戦者のスポンサーフィットが観戦者の行動意図に及ぼす影響

平野貴也（名桜大学・順天堂大学協力研究員），岡安功（広島経済大学），住田 健（日本福祉大学）

キーワード：スポンサーフィット，スポンサーへの態度，行動意図

【目的】

本研究は，神奈川県横須賀市で開催されたウインドサーフィン・ワールドカップ2019におけるスポンサーフィット，サービスクオリティ，スポンサーへの態度，行動意図の関連性を明らかにすることを目的とする。

【方法】

2019年5月10日から12日に「Fly! ANA ウインドサーフィン・ワールドカップ横須賀・三浦大会」に会場した観戦者を調査対象とし，自己記入式の調査用紙を6名の調査員が直接配布し，その場で直接回収した。配布数は600，回収数は596，有効回答数は539部（89.9%）であった。

調査内容は属性，観戦行動，サービスクオリティ，スポンサーフィット，スポンサーへの態度，行動意図であった。サービスクオリティについては2017年の同大会による調査によって作成された「運営サービス」「観戦サービス」「周辺サービス」「会場サービス」の4因子12項目を用い，SPSS27.0およびAMOS27.0によって分析を行った。

【結果と考察】

対象者は男性が53.4%（288名），女性が46.6%（251名）であり，年齢は13歳から80歳に分布しており，40代50代が多く，平均年齢は50.6歳（SD=14.5）であった。居住地は，神奈川県が86.6%（467名）であり，そのうち46.6%（251名）は開催地である横須賀市内であった。

確認的因子分析では，適合度指標の基準を満たすことが確認でき，仮説モデルの検証を行った。その結果，スポンサーフィットはサービスクオリティ（ $\beta = .58, p < .01$ ）及びスポンサーへの態度（ $\beta = .46, p < .01$ ）に影響を及ぼしていることが明らかとなった。またスポンサーへの態度は購買意図（ $\beta = .88, p < .01$ ），サービスクオリティは再観戦意図（ $\beta = .39, p < .01$ ）に影響を及ぼしており，スポンサーフィットの高まりは行動意図を高める要因となることが示唆された。

謝辞 本研究は JSPS 科研費（課題番号 19K19949）の助成を受けたものである。

## 編集後記

新型コロナウイルス感染症により新しい生活様式が求められています。本年度に予定されていた多くの学会がリモートでの開催や中止したケースも少なくありません。本学会も、9月に予定されていた第9回大会を12月に会期を変更し、Zoomによる遠隔開催としました。当初、予定されていたシンポジウムなどは中止し、発表演題も少ないのですが来年度の第10回大会に続く場になるかと思えます。

また、9月に理事改選が行われ久門新会長が就任されました。それにとまなう組織の変更により、従来の編集委員会と査読委員会が合併し、編集委員会に一本化されました。本学会は、多分野の研究者において構成されていることから、人文社会科学、自然科学の研究者が混在しています。今年度中には、投稿規定、査読規定の見直しを検討しております。

最後になりますが、本号の発行にあたり、ご協力頂いた関係各位に深く御礼申し上げます。

(松本秀夫)

### 日本海洋人間学会編集委員会

委員長／松本秀夫

副委員長／藤本浩一

編集委員／有田俊晃、植田 央、遠藤大哉、

佐藤淑子、遠矢英憲

---

海洋人間学雑誌 第9巻第2号

2020年11月 発行

発行者 久門明人

発行所 日本海洋人間学会

〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7 東京海洋大学内

郵便振替 加入者名 日本海洋人間学会

口座番号 00150-6-429943

TEL/FAX : 03-5463-0638 (藤本研)

URL : <http://www.jsmta.jp/>

E-mail : [jsmta@jsmta.jp](mailto:jsmta@jsmta.jp)

---

Vol.9 No.2

November 2020

# **Japanese Journal of Maritime Activity**

Japan Society for Maritime Activity (JSMATA)

---